



Integrated Research in the Bishri Mountains on the Middle Euphrates

セム系部族社会の形成



文部科学省科学研究費補助金
「特定領域研究」
Newsletter No. 2

2006年3月号



目 次

イラン・ボラギ溪谷遺跡の調査に参加して	大沼克彦	1
セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究	藤井純夫	5
「文書史料におけるセムの系譜、アムル人、ビシュリ山系」	山田重郎	8
「マルトゥの結婚」によせて	前川和也	14
セム系部族社会の形成に「環境学」を求めて	田中 剛	22
発掘における考古植物学のススメ	丹野 研一	25

表紙

A
B | C

A : アアリのシスト墓群 (バーレーン)

B : エン・ナケーの竪坑型シスト墓群 (ヨルダン)

C : ジャバル・ハフィートの円塔墓群 (エミレーツ)

イラン・ボラギ溪谷遺跡の調査に参加して

大沼克彦（国士舘大学イラク古代文化研究所）

計画研究「西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係」研究分担者

平成17年の8月1日から11日まで、イラン・イスラム共和国ファルス県シヴァンド川流域にあるボラギ溪谷遺跡の調査に参加した。

この調査を通して、2つの地点(地点75(BV75):写真1、地点130(BV130):写真2)で5千点ほどの石器が出土したが、石器の素材となった岩石は濃茶色から緑色をしたチャート質フリントである。最大資料は長さ47mm、幅24mm、厚さ24mmと極めて小形で、ボラギ溪谷遺跡での石器製作が小形の石材を用いておこなわれていたことがわかる。

石器の内訳はデビタージュ、即ち、石核剥離の産物としての意図的剥片と、石核修正剥片、チップあるいは二次加工由来剥片、二次加工石器、石核である。主なデビタージュは石刃と細石刃である。

二次加工石器は、背潰し石刃/細石刃、挟入石刃/細石刃、尖頭石刃/細石刃、サイド・スクレイパー、エンド・スクレイパー、急角度スクレイパー、親指爪状スクレイパー、彫器である。これ



写真1 ボラギ溪谷遺跡地点75（筆者撮影）



写真2 ボラギ溪谷遺跡地点130（筆者撮影）

らは極めて小形で、非幾何学形細石器と呼べるものが多く存在する。これとは別に、三日月形や台形をした幾何学形細石器も少なからず存在する。

石刃を分割して幾何学形細石器を製作する際に生じるマイクロ・ピュランは1例もみられなかった。また、幾何学形細石器は細石刃自体よりも小形である。従って、ボラギ溪谷遺跡の幾何学形細石器はマイクロ・ピュラン技法で作られたのではなく、細石刃に二次加工を施すことで作られたと考えることができる。

マイクロ・ピュランの欠如に関しては、ボラギ溪谷ではこの技法がすでに採用されなくなっていたという時代性、あるいは、もともとこの地に存在しなかったという地域性の二つが考えられる。

ボラギ溪谷遺跡の剥片と石刃は打撃で剥がされている。そして、石核の多くは角柱形を呈している。新石器時代にしばしばみられる押圧石刃は皆無である。

細石刃は押圧で剥がされていて、極めて規則的な剥離である。同様に、細石刃石核は規則的な剥離痕を残している。それらは、円錐形、角錐形、角柱形を呈している。しかし、「砲弾形」をしたものはみられない。

上述したように、ボラギ溪谷遺跡の石器群はエンド・スクレイパー、親指爪状スクレイパー、そして、非幾何学形細石器やかなりの数の幾何学形細石器で構成されている。この点で、西イラン地方のワルワシ岩陰遺跡(Olszewski 1993)に代表されるザグロス山麓の続旧石器・ザルジアン石器群の特徴を備えている。

しかし、ワルワシ岩陰遺跡のザルジアン石器群とは異なり、細石刃剥離のために押圧が用いられている。

全体としてみれば、ボラギ渓谷遺跡の石器群をザルジアン石器群の終焉から、押圧剥離を有していた「プロト・ネオリシック(Mellaart 1965: 18)」のあいだの、ある時期に年代づけることが可能である。特に、石器の内訳が詳細に報告されている北イラク・ザグロス山麓の遺跡ザヴィ・チェミ・シャニダール(Solecki 1981)、ケルメツ・デーレ(Watkins et al. 1991)、ネムリク9(Kozłowski and Kempisty 1990)、ムレファート(Howe 1983)、カリム・シャヒル(Howe 1983)などの「プロト・ネオリシック」石器群の中に年代づけることができるだろう。

この「プロト・ネオリシック」石器群とは別に、最近になり、イラン西部ルリスタン地方ザグロス山麓のヴァーレ・ザルド岩陰複合遺跡でボラギ渓谷遺跡石器群に類似した資料が報告されている。この複合遺跡では、続旧石器的石器と「プロト・ネオリシック」的石器が崖線に沿って200mほどにわたり分布している(Roustaei, et al. 2004)。これらのすべてが同一時期のものであった確証はないが、石器の内訳が鋸歯縁石刃・細石刃、エンド・スクレイパー、錐などで、また、精巧に剥離された石刃と細石刃を有していることなど、ボラギ渓谷遺跡石器群に類似している。ヴァーレ・ザルド岩陰複合遺跡においても石刃は押圧で剥離されてはならず、細石刃だけが押圧で剥離されている。細石刃石核のなかには、「砲弾形」と呼べる極めて精巧なものが存在する。

より正確な年代づけは今後の課題であるが、幾何学形細石器と押圧細石刃の存在から、ボラギ渓谷遺跡石器群をさしあたり、ケルメツ・デーレ遺跡段階5、4、および、ネムリク9遺跡下層に関連づけることができそうである。さらに、細石刃の押圧剥離がザグロス山麓のなかでも東方のイラン方面で早く出現したという可能性を考慮すれば、精巧な細石刃押圧剥離を有していたムレファート遺跡やカリム・シャヒル遺跡にあまり離れず先行した石器群であったと考えることもできるだろう(表1)。

謝辞

本論の掲載にあたり、筑波大学大学院人文社会科学研究所の常木晃教授よりご配慮を頂きました。イラン国立博物館旧石器研究センターのFereidoun Biglari 博士には、イランと周辺地域の先史時代に関する幅広く有益な情報を提供して頂きました。末尾ながら、両氏に御礼申し上げます。

参考文献

- Howe, B. 1983 Karim Shahir, *Prehistoric Archeology along the Zagros Flanks*, edited by L.S. Braidwood, R.J. Braidwood, B. Howe, C.A. Reed and P. J. Watson, Vol.105 of the University of Chicago Oriental Institute Publications, Chicago, pp.23-154.
- Kozłowski, S.K. and A. Kempisty 1990 Architecture of the Pre-pottery Neolithic Settlement in Nemrik, Iraq, *World Archaeology* 21-3, pp.348-362.
- Mellaart, J. 1965 *Earliest Civilizations of the Near East*, Thames and Hudson, London.

Ohnuma, K. 1997 Chronology of the "Proto-Neolithic" of Iraq and Syria: A Hypothetical View, *Al-Rafidan* Vol. XVIII, pp.45-58.

Olszewski, D. I. 1993 The Zarzian Occupation at Warwasi Rockshelter, Iran, *The Paleolithic Prehistory of the Zagros-Taurus*, edited by D.I. Olszewski and H.L. Dibble, Monograph 83 of the University Museum, University of Pennsylvania, pp.207-236.

Roustaei, K., H. Vahdati Nasab, F. Biglari, S. Heydari, G.A. Clark and J.M. Lindly 2004 Recent Paleolithic Surveys in Luristan, *Current Anthropology* Vol.45, No.5, pp.692-707.

Solecki, R.L. 1981 *An Early Village Site at Zawi Chemi Shanidar*, Bibliotheca Mesopotamica Vol.13, Undena Publications, Malib.

Watkins, T., Betts, A., Dobney, K., Nesbitt, M., Gale, R. and T. Molleson 1991 *Qermez Dere, Tel Afar: Interim Report No.2, 1989*, Project Paper No.13, Department of Archaeology, University of Edinburgh.

表 1 ザグロス山麓の「プロト・ネオリシック」石器群におけるボラギ溪谷遺跡の仮説的位置づけ(幾何学形細石器と押圧細石刃の存在を考慮している: Ohnuma(1997: Fig. 5)を修正)

西方ザグロス	東方ザグロス
マイクロ・ビュラン技法・・・・・・・・・・	続旧石器時代
	ザヴィ・チェミ・シャニダール
ケルメツ・デーレ段階 7	
ケルメツ・デーレ段階 6	
・・・・・・・・・・幾何学形細石器・・・・・・・・・・	
ケルメツ・デーレ段階 5	ボラギ溪谷遺跡
ケルメツ・デーレ段階 4	ネムリク 9 下層 ・・・・・・・・細石刃の押圧剥離
ケルメツ・デーレ段階 3	ネムリク 9 中層 ムレファート カリム・シャヒル
ケルメツ・デーレ段階 2	ネムリク 9 上層
マグザリーヤ	
・・・・・・・・・・土器・・・・・・・・・・	土器新石器時代

セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究

藤井純夫（金沢大学文学部）

計画研究「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」研究代表者

セム系部族社会の形成過程を墓制面から追跡すること。それが、本研究班に与えられた課題である。そのために選択したフィールドが、シリア北東部のビシュリ山系とヨルダン南部のジャフル盆地である。バーディアト・シャーム(広義のシリア沙漠)の南北両端に位置するこの二つの地域で、初期遊牧民の墓制変遷を定点観測すると同時に、周辺地域における広域踏査をも併せて、セム系遊牧部族社会全体の成立経緯を明らかにしたい。

ビシュリ山系での調査の立ち上げが諸般の事情で遅れたため、本年度は、周辺比較対象地域の踏査を先行実施した。都合により、踏査は二回に分けて実施した。

オマーンにおける青銅器時代円塔墓群の踏査

平成17年11月16日から同年11月27日にかけて実施した。バット(Bat)、ワディ・ギズイ(Wadi Jizi)など、オマーン国内における主要な青銅器時代円塔墓群を踏査し、基本的な遺跡データを収集した。円塔墓に着目したのは、この墓制が、南(西)セム語集団の形成に関わっていると仮定されるからである。その流れは、シナイ半島南端部からサウジアラビア西部、イエメンを経て、オ



図1 アアリのシスト墓群（バーレーン、筆者撮影）



図2 ジャバル・ハフィートの円塔墓群（エミレーツ、筆者撮影）

マーン、エミレーツ東部にまで及んでいる。今回の踏査では、その一端をオマーン国内で観察・記録したことになる。まだまだ先は長いが、第一歩を踏み出したことが本踏査の成果である。

バーレーン、カタール、エミレーツ、ヨルダンにおける青銅器時代墳墓群の踏査

平成17年12月20日から平成18年1月10日にかけて実施した。バーレーンではアアリ(Ali)、ブリ(Buri)、サアル(Sa'ar)、カタールではウンム・サラール・アリ(Umm Salal Ali)、ウンム・アル・マア(Umm al-Ma')などのシスト墓群を、エミレーツではヒリ(Hili)、ジャバル・ハフィート(Jabal Hafit)などの円塔墓群を、またヨルダンではエル・アデイメ(el-Adeimeh)、フェイファ(Feifa)、エン・ナケー(en-Naqe)などのシスト墓群、ダーミヤ(Damiya)などのドルメン群を、それぞれ踏査した(図1、2)。

バーレーン、カタールのシスト墓については、東セム語集団の墓制からの影響と仮定しているが、詳細はまだ不明である。今回の踏査は、基礎資料の収集に止まった。エミレーツの円塔墓は、オマーンのそれと同系で、南(西)セム語集団を特徴づける円塔墓文化の最遠端の事例と考えられる。しかし、詳細に観察すると、型式・立地などの点でオマーンとの地域差が介在することが分かった。ヨルダンのシスト墓は、北西セム語集団の形成に関わると仮定される墓制であり、ジャフル盆地の従来調査でもその出現時期が前期青銅器時代初期にあることが確認されている。今回の踏査では、ヨルダン渓谷におけるシスト墓の実態を探った。その結果、ヨルダン高原とは異質の、竪坑型シスト墓の存在が明らかになった(図3)。なお、これとほぼ同時期と考えられているドルメン・メンヒルについては依然として不明な点が多い。シスト墓の一形態と見なし得るならば北西セム語集団の墓制の一つと言うことになるが、それとはまったく別系統とも見なし得る。



図3 エン・ナケーの竪坑型シスト墓群（ヨルダン、筆者撮影）

その場合は、北西セム語集団に先行する集団(あるいは北方からの別の動向と対応する集団)の墓制ということになるであろう。これは今後の検討課題である。

なお、ヨルダンを除く上記各国では考古局を訪問し、近い将来における調査の可能性を探った。いずれの場合も好意的な返答を得た。特にオマーンやカタールでは具体的な条件の提示も受け、全面的な協力の確約を得た。将来の調査が楽しみである。

まとめ

沙漠に埋もれているマルトゥーやアモリたちの足跡を墓制面から具体的に追跡すること---その第一歩がようやく踏み出された。本年度の活動は、当面の作業仮説を策定すること、これに関わる基礎的な遺跡データを収集すること、の2点に集中したが、次年度からはビシュリ山系およびジャフル盆地での本格的な調査に入りたい。これと平行して、イエメン、レバノン、サウジアラビアなどの踏査も、引き続き実施する予定である。

「文書史料におけるセムの系譜、アムル人、ビシュリ山系」

山田重郎（筑波大学大学院人文社会科学研究所）

計画研究「西アジアにおける都市化過程の研究」研究分担者

「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」という特定領域研究に取り組むにあたり、文献学の立場からキーワードについての基礎的データを整理するのが本稿の目的である。特に、セム系遊牧民とその源郷とされるビシュリ山についての古代西アジアの文書史料のデータを、前3千年紀から前2千年紀前半を中心に整理したい。

「セム」とは？： 起源と語義

「セム」とは本来、大洪水を生き残って西アジア諸族の祖となったノアの長子として旧約聖書創世記に登場する人名(ヘブライ語でシテム)である。創世記によれば、神は天地創造の仕上げとして自ら創造した人間の行いが悪いことを嘆き、洪水を送ってすべての生き物を滅ぼそうと決意した。しかし、神に忠実であったノアには箱舟を作らせ一族とともに洪水を生き残ることを命じたという。ノアとともに箱舟に乗り生き残った3人の息子の名は、セム、ハム、ヤフェトであった。一般に「民族表」とよばれる創世記10章は、3人の息子たちから別れ出た子孫たちの名として西アジアとその周辺の民族名、部族名、地名に言及して、各地の諸族はノアから別れ出た血縁集団であると説明する。

ヤフェトの子孫は、エーゲ海、アナトリア、イランのインド・ヨーロッパ語系を中心とする諸族である。ハムの子孫は、エジプトとその周辺世界の諸族。そしてセムの子孫は、メソポタミア・シリアの諸族でありイスラエルの祖となるエベルを含む。「民族表」は、前2千年紀後半から前1千年紀前半の主要な国家名・部族名ならびに地名を含んでいる。地理的・政治的結びつきが重視されており、必ずしも言語的均質性によってまとめられているわけではない。セムに関していえば、旧約聖書のセムの子孫に数えられる諸族には、アシュル、アラムのように言語的に明らかにセム語系(後述)に属するものの他にエラム系、アナトリア系、フリ系などの非セム語系の諸族が含まれている。その一方で、言語的にセム系であるはずのカナンはハムの子孫に数えられている。「セム人」についての現在の辞書・事典にみる一般的定義は、「現在においては主にユダヤ人とアラブ人によって、また古代においては、さらにバビロニア人、アッシリア人、アラム人、カナン人、フェニキア人等によって代表される西南アジアの人々」というものである。これらセム人の話す諸言語は、アフロ・アジア系言語という大言語グループのなかで最大のサブ・グループである縁戚言語集団を形成し「セム語」と総称される。セム系諸語は、複数の共通する言語学的特徴を有する。

3子音を語基とする独特の語形成をし、基本語彙が共通であること。動詞が完了・未完了からなるテンス・アスペクト・システムを有し、接頭辞、接尾辞をともなって人称と数によって特徴的な活用をすること、などである。アッカド語、アムル語、アラム語、フェニキア語、ヘブル語、アラビア語、エチオピア諸語などに共通して見られるこうした言語学的特徴は、これらの言語の話者たちの間に存在した何らかの歴史的・文化的関係を示唆するものと考えられる。

「セム」という語は、特に欧米において、非ヨーロッパ系の主要なマイノリティー・グループとなったユダヤ人を指してしばしば用いられた。こうしたもっぱらユダヤ人を意味する狭義の「セム」の用法は、メソポタミア・シリアのセム系諸民族を包括的に示す「セム」の本来の広い語義から切り離されて、反ユダヤ主義を意味する「アンティ・セミティズム」のような現代政治上の用語として再加工され、ヨーロッパと中東の民族問題を論じる際に頻繁に用いられている。その一方で、「セム」はセム系言語という歴史の実体によって裏付けられた包括的な言語学的・歴史学的概念として、古代西アジア研究において用いられる語なのである。例えば、標準的なアラブ史として多くの読者を得てきたP. K. ヒッティのアラブ史(Hitti 1937)の第1章のタイトルは、「セム人としてのアラブ人：セム系民族の故地としてのアラビア(The Arabs as Semites: Arabia the Cradle of the Semitic Race)」である。ヒッティはセム人は故地アラビア半島から各地へ拡散していったという見解を採用したうえで、セム人の民族的純粋性は、海と砂漠によって周囲から地理的に隔離したアラビア半島のアラブ人に特によく保たれたと考えている。後述するように、前3千年紀から前2千年紀にかけてのデータが増え研究が進展してきた今日では、こうした仮説は細部において見直しを迫られるものであろうが、今日的学術書のなかで「セム」が特にアラブ人と結び付けられている例として挙げておきたい。

前3千年紀前半のセム系民族についての文書史料

言語学的基準による現行の「セム系」の定義に従えば、古代西アジアにおいてセム系住民の系譜をたどることは、文字資料においてセム語の使用を追跡することにほぼ等しい。文字資料によってメソポタミアで話されていたことが追跡できる最古の言語はシュメル語であり、その使用は遅くとも前2800年頃に遡ることができる。最古の文字とされるウルク第IVa層の古拙文字がシュメル語をあらわすものであれば、さらに前3200年頃までさかのぼる。ともあれ、すでに前3千年紀前半のメソポタミアにおいて、シュメル語と並んでアッカド語を中心とするセム語もまた使用されていたことは確実である。例えば、初期王朝時代I期(前2900-2750年)に相当するとされるシュメル王名表において洪水後最初に王権が下った都市キシユの王たちの名としてシュメル語人名と並んでアッカド語あるいはそれに近いセム系言語の人名が含まれている。Pala-kinatim(「正しきものの治世」の意)、Kalibum(「犬」)、Zuqaqip(「サソリ」)、Tizkar(「(神を)記憶せよ」)などである。前2600年頃のテル・アブ・サラビーフ出土のシュメル語文書の書記名にも複数のセム語の人名が含まれている。また同時期のファラ文書(前2600年頃)に含まれる農夫のリストには、E₂-su₁₃-ag₂ というシュメル語人名に続いてmar-tuと記され、この人物がシュメル語でmar-tuと呼ばれたセム系アム

ル人(後述)であることが記録されている。こうしたアッカド王朝時代(前2334-2154年)以前のアッカド語あるいはそれに近似する古セム語を使用した人々の痕跡は、メソポタミア南部に限定されず、1970年代からのエブラ、テル・ベイダル、マリの楔形文字文書の研究により、さらに北シリア、ユーフラテス川中流域、ハブル川上流域でも確認されるようになった。そしてアッカド王朝時代以降、メソポタミアとシリアにおいて、アッカド語やアムル語などのセム語の地位は揺るがぬものになっていた。

アムル人とビシュリ山

古代西アジアの文書史料に確認される最古のセム系遊牧集団として注目されてきた人々がアムル人である。彼らはシュメル語でマルトゥ(mar-tu)、アッカド語でアムル(Amurrû)と呼ばれ、旧約聖書でイスラエルのカナン定着以前の先住民族の一つとして言及されるアモリ人(émorî)と同定された。民族名・地名としてのマルトゥ/アムルは、メソポタミアの文書において、シュメル人やアッカド人と区別される外来の人々を指しており、前述の前2600年頃のファラ文書中での言及が初出である。また、マルトゥはメソポタミアから見て西の方角を指す語としても用いられたが、この語義では、アッカド王朝の3番目の王マニシュトゥシュ(前2269-2255年)のオベリスクに言及される「西の風 [= 方向 [tu₁₅ mar-tu)]」が最も古い。このことは、おそらく、マルトゥ/アムルが本来メソポタミアの西に位置する地名であり、そこを故地とする人々がマルトゥ人/アムル人と呼ばれたことを示唆するものであろう。

マルトゥ/アムルを特定の地名と結びつけるデータも複数残っている。前2300年頃のエブラ文書は、マルトゥ(mar-tu.KI)をユーフラテス川沿いのエマルとバリフ川河口地域のトゥトゥルに関係づける。また、アッカド王朝第4代のナラム・シンはユーフラテス川を超え「マルトゥの山であるバサル山(Ba-sa-ar SA-DU_{3-i3} MAR.TU.KI)」に達し、そこで戦ったことを記録する。ここに言及されるバサル山は、パルミラの北東に位置する現在のビシュリ山を指していると考えられる。ナラム・シンの後継者であるシャル・カリ・シャリもまた年名「シャル・カリ・シャリがバサル山においてマルトゥを打ち破った年(in MU sar-ka_{3-li2}-LUGAL-ri₂ MAR.TU-am in ba-sa-ar. KUR iš₁₁-a-ru)」においてマルトゥとビシュリ山を結び付けている。この遠征の目的は必ずしも明らかでないが、メソポタミアの農耕地に進入する遊牧民に対する懲罰遠征であった可能性が高い。アッカド時代の直後にあたるラガシュの支配者グデアの碑文(Statue B)において、グデアは神殿建設に際して「マルトゥの山であるビシュリ(バサラ)山(ba₁₁-sal-la hur-sag Mar-tu-ta)」ならびに「マルトゥの山であるティダヌ山(ti-da-num₂ hur-sag mar-tu-ta)」から石材を運び込んだことを誇っている。ビシュリ山をマルトゥ/アムル人の山とする伝統はさらに後代にも引き継がれた。新アッシリア時代の写本が複数知られている lipšur litanies とよばれる祈禱書には、ビシュリ(バシャル)山(KUR Ba-šar₂)がアムルの地の山(KUR A-mur-ri-i)として言及される。また、ティグラト・ピレセル1世(前1114-1076年)の年代記はビシュリ(ベシュリ)山(KUR be₂-eš-ri)のふもとの遊牧アラム人(Ahlamu-Aram)の6つの「町々(小集落?)」の破壊を記録しており、これもセム系遊牧民とビシュ

り地域を結びつける記録として興味深い。

メソポタミアにおけるマルトゥに話を戻すと、アッカド王朝時代には、マルトゥと呼ばれる外来の移住者についての言及がラガシュ、ウンマ、アダブ、スサなどメソポタミアとその周辺で増加する。アッカド王朝時代の文書に見られる官職名ugula mar-tuおよびnu-banda₃ mar-tu-nelは、マルトゥ人たちの隊長あるいは指揮官を意味し、彼らが当時の都市行政内で一定の軍事的役割を担っていたことをうかがわせる。

ウル第3王朝時代(前2112 - 2004年)に入ってマルトゥについてのデータはさらに増える。特にウル第3王朝の家畜税の集積地であったブズリシュ・ダガンからの文書には、家畜(ヒツジ、ヤギ)の提供者としてマルトゥについての多数の言及が見られる。イシン、ラルサ、ウンマなどにも労働者として配給を受けるマルトゥについての言及がある。この時代、特にメソポタミア南部において、マルトゥの一部はすでに都市住民として定着し都市文化に同化していたように見える。一方、西方からメソポタミアへのマルトゥの流入は継続しており、ウル第3王朝時代後半において、ウルの広域支配を脅かす侵入者としてのマルトゥは無視できない存在となり、彼らに対する遠征や、彼らの侵入を防ぐ城壁建設が企てられたことはよく知られている。シュメル語で書かれた神話「マルトゥの結婚」のマルトゥ神に託された不毛の地に住む野蛮人としてのマルトゥのイメージは、メソポタミアの本来の都市住民から見たマルトゥ観を反映するものであろう。ただ、マルトゥがメソポタミア西方の彼らの故地においてどのようなライフ・スタイルで生活していたかをメソポタミアに由来する文学テキストに依拠して判断するわけにはいくまい。時代は多少下がるものの、古バビロニア時代のマリ文書は、当時のアムル人の生活形態がユーフラテス中流域での定住を基礎とする半農・半牧畜であり、牧羊者としては短距離移動型であったことを示唆する。こうしたアムル人とメソポタミアに大挙して殺到したアムル人のライフ・スタイルを同一のものとして捉えることはできない。

ともあれ、古バビロニア時代(前2千年紀前半)には、アムル語の人名をもった個人がラルサ、バビロン、マラド、ウルク、シッパル、キシユ、マリなどのメソポタミアの主要都市の支配者として現れる。そして、アムル人がメソポタミアの主要な人口構成要素になるにつれて、個人をマルトゥ/アムルとしてわざわざ指示する慣行はしだいに失われた。アムル人の諸部族は、マリ文書などに見るように、より小さなサブ・グループを代表する部族名(例えばハナ人、ビニヤミナ人など)によって呼ばれるようになった。古バビロニア時代後期に至ると、アムル語の人名を持った個人を多く内包するメソポタミアにおいて、民族的呼称としてのアムルという語はあまり使用されなくなる一方、シリア一体あるいはその一部の地域が「アムルの地」と呼ばれるようになっていった。

前3 - 2千年紀のセム人とセム語に関する再考

先述したとおり、アムル人は前3千年紀半ばにはメソポタミアにいた。この事実に加え、近年のエブラ、マリ、テル・ベイダルにおける前3千年紀の古セム語文書の発見によって、前2000年頃にアムル系遊牧民がシリア砂漠から周辺各地に大移動して拡散したとするかつて広く受け入れ

られてきた仮説は見直しを迫られてきた。そこで、長年シリア各地で発掘調査を行いアムル人に関わる文書研究をも主導してきたG. ブッチェラティが提案する仮説(Buccellati 1992)に言及して本稿を結びたい。

ブッチェラティは、アムル人は本来前2千年紀のマリ文書に見られるようなユーフラテス中流域の半農・半牧畜の村落住民であったとし、以下のように推察する：これら村落民たちは川沿いに限定された農地を耕作する一方、広大なステップ地域に牧畜による経済活動の拡大を企て、おそらくすでに前3千年紀からマリの都市の権力と独特の関係を保っていた。こうした住民たちの一部はステップの遠方まで進出して都市の支配から離脱し、民族意識を醸成しつつ本格的に遊牧民化し、遠距離を移動して各地に拡散した。このパターンは早期からあったが、それが最も大規模に起こったのが、前3千年紀末から2千年紀初めであったという。

エブラ文書の研究が進むにつれて、エブラ語は当初の予想を裏切って西セム語よりも東セム語である古アッカド語に近い言語であることが明らかになった。これによってユーフラテス川大湾曲部の西側を西セム語圏、東側を東セム語圏とする従来の見方は破綻した。これに関連して、現状で知られているセム系言語の歴史的分布をブッチェラティは次のように説明する：前3千年紀において、アムル語はユーフラテス中流域とその周辺の村落言語として、アッカド語はメソポタミア・シリアの諸都市に流布した都市言語として、対比的に捉えられる。両者は本来広い意味で共通の特徴をもった言語(古北セム語 Early North Semitic)だったが、保守的で変化しにくい村落言語アムル語の方が本来の言語的特徴を保ち、アッカド語は時代とともに急速に変化していった。両者はしだいに言語としての隔たりを大きくしていき、前2千年紀後半にはユーフラテス中流域の村落が離散した結果西へ流入したアムル系住民が西セム語グループ(アラム語、フェニキア語、カナン語等)の祖となって、西セム語と東セム語(アッカド語)との地理的棲み分けが実現した。

ブッチェラティの仮説は、前3千年紀半ばから前2千年期前半のシリア・メソポタミアの文書史料に見るアムル人とセム系言語に関するデータをダイナミックに説明しており、今後の研究のたたき台となるものといえる。アムル人の地として古い伝承が残るビシュリ山とその周辺地域をめぐる新たな調査研究の成果も、こうしたパラダイムと対照しつつ分析されるべきであろう。

(2006年1月28日 記)

(謝辞： 執筆にあたり、前川和也先生に草稿をご覧いただき、貴重なご指摘をいただいたことで、いくつかの誤謬を免れることができた。記してお礼申し上げたい。なお本稿に残る問題点については、言うまでもなく全面的に筆者の責任である。)

参考文献：

Ambar, M. 1991: *Les tribus amurrites de Mari*, Orbis Biblicus et Orientalis 108, Göttingen.

- Buccellati, G. 1966: *The Amorites of the Ur III Period*, Napoli.
- Buccellati, G. 1992: "Ebla and the Amorites," in C.H. Gordon and G.A. Rendsburg (eds.), *Eblatica: Essays on the Ebla Archives and Eblaite Language*, vol. 3, Winona Lake, Indiana, 83-104.
- Catagnoli, A. 1998: "The III Millennium Personal Names from the Habur Triangle in the Ebla, Brak and Mozan Texts," *SUBARTU*, IV/2, Turnhout, 41-66.
- Edzard, D.O. 1989: "Martu," *Reallexikon der Assyriologie*, Band 7, 433-440.
- Hitti, P.K., 1937: *History of the Arabs*, London.
- Kupper, J.-R. 1957: *Les nomades en Mésopotamie au temps des rois de Mari*, Paris.
- Lerberghe, K. van 1996: "The Beydar Tablets and the History of the Northern Jazirah," *SUBARTU*, II, Turnhout, 119-122.
- Liverani, M. 1973: "The Amorites," in D.J. Wiseman (ed.), *People of Old Testament Times*, Oxford, 100-133.
- Streck, M.P. 2000: *Das amurritische Onomastikon der albabylonischen Zeit, Band 1: Die Amurriter: Die onomastische Forschung, Orthographie und Phonologie, Nominalmorphologie*, AOAT 271/1, Münster.
- Whiting, R.H. 1995: "Amorite Tribes and Nations of Second Millennium Western Asia," in J. Sasson (ed.), *Civilizations of the Ancient Near East*, vol. II, New York, 1231-1242.
- Wilcke, C. 1969: "Zur Geschichte der Amurriter in der Ur III Zeit," *WO* 5, 1-31.

「マルトゥの結婚」によせて

前川和也 (国士舘大学21世紀アジア学部)

計画研究「シムール文字文明」の成立と展開」研究代表者

1.

「マルトゥの結婚」とは、シムール語で書かれた1文学作品に研究者が与えた名称である。この文学作品が書かれている粘土板CBS 14061は、前2千年紀前半のニッブルから出土しており(ペンシルヴァニア大学博物館蔵)、粘土板の手写コピーは、E. Chiera, *Sumerian Epics and Myths* [= SEM] (Oriental Institute Publications XV), 1935, No. 58として公刊されている。

ここでまず注意しておかなければならないことがある。それは「マルトゥの結婚」が書かれている粘土板は、現在までわずか一枚しか発見されていないという事実である。前2千年紀の前半にはおおくのシムール語文学作品が成立したが、たいていのばあい、われわれは、1作品について重複する粘土板をもっている。文学テキスト粘土板はシムール北部のニッブルで出土するだけでなく、しばしば南部ウルでも同じ文学テキスト粘土板が発見されている。だから、たとえ個々の粘土板が小断片であっても、われわれはそれらを対照しつつ、あるいはつぎあわせつつ、なんとか文学作品の全体を復元していくのである。ところが、この手法は「マルトゥの結婚」には適用できない。しかも問題の粘土板は裏面部がおおしく欠損しているため、物語プロットの完全な復元が不可能なままなのである。さらに残念なことは、テキスト相互の比較ができないためにCBS 14061にみえる難解な個所についての議論が中途半端なままで終わってしまうのである。またこれは、物語がなぜ、どのような意図のもとで生まれたのかについても、重要な問題を投げかけている。粘土板の手写自体にもいくつかの疑点があるから、問題はさらに深刻である。〔文学テキスト粘土板が1枚しか発見されていないために、さまざまな問題が未解決のままのこされている例としては、他にはシムール語「大洪水」物語をあげておけばよいであろう。〕

ただ、だからといって「マルトゥの結婚」が当時あまり知られていない作品だと結論することはできない。粘土板のなかには文学作品カタログとでもいうべきものがある。文学テキスト冒頭の文章が集められているのである。そしてウル出土カタログ(そしておそらくニッブル・カタログ)のなかに「マルトゥの結婚」第1行(NI-na-ab^{ki} i3-me-a kiris-tab nu-me-a「イナブ(ないしニナブ)が(この世に)存在したとき、キリタブはまだ存在していなかった」)前半が書きこまれている。UET 5 86 [Ur] 3) NI-na-ab i3-me-a; cf. TMHNF 3 54 [Nippur] 29) in-na-ab me-a.

以下「マルトゥの結婚」についての、最近のアルファベット翻字および翻訳をあげておく。

1. Electronic Text Corpus of Sumerian Literature 1.7.1 (1999)(翻字および翻訳)オックスフォード大学

東洋学科によるシュメール語文学テキスト電子出版。

2. J. Klein, The god Martu in Sumerian literature, in I.L. Finkel and M.J. Geller (eds.), *Sumerian Gods and Their Representations* (1997), 99-116. 翻字、翻訳 (Appendix: 110-116)およびマルトゥ神についての論。文学テキストにみえるマルトゥ神についての研究史が簡潔に要約されており、必読文献といえる。
3. S.N. Kramer, The marriage of Martu, in J. Klein and A. Skaist (eds.), *Bar-Ilan Studies in Assyriology Dedicated to Pinhas Artzi* (1990), 11-27. (翻字および翻訳)
4. J. Bottéro et S.N. Kramer, *Lorsque les dieux faisaient l homme: Mythologie mesopotamienne* (1989), 430-437 (Le mariage de Martu) . (翻訳)
5. W.H.Ph. Römer und D.O. Edzard, *Texte aus der Umwelt des Alten Testaments III/3: Mythen und Epen I* (1993), 495-506 (Römer, Die Heirat des Mardu) . (翻訳)

「マルトゥの結婚」の行数復元にかんしては、まず全4コラムをもつ原粘土板の末尾に、この作品は計142行よりなることが明記されている。粘土板表面部の行割りふりには深刻な問題はない。裏面部第三コラム中段の欠損個所にどのように行を割りあてるかで、多少の意見のちがいがみられるだけである。とりあえずここでは、クラインによる行復元(文献2)にしたがっておく。

2.

私は「マルトゥの結婚」のプロットを、とりあえず次のように復元してみる。

1. イナブ(ないしはニナブ)の町への称揚 (1~14)。
2. イナブ(ないしニナブ)町の郊外では、人々は網を広げ、ガゼル狩猟にあけている。ある夕刻、神の前での(?)獲物の「分配(?)」の場で、「分配(?)」の量が定められる。独身者の量を1とすれば、妻子ある男は3、妻を持つ男は2であったが、独身者マルトゥ神は、2と定められる(15-25)。
3. 不満を抱いたマルトゥは、母親に訴える。友人たちはすでに妻子をもっているが、自分だけが独身だ。独身の自分の「分配(?)」の量は友人の量より多い(26-33)。
4. 肉の量決定が同じ原理で繰り返され、マルトゥはふたたび母親に訴える。結婚させてほしい。そうすれば、「分配(?)」をあなたのところへもってくる、と(34~43)。
5. 母親はマルトゥに助言を与える。結婚しなさい。けれども市外に家を持ち、果樹園(?)をもって、仲間と暮らせ。そこで井戸を掘って暮らしなさい(44~52)。
6. ちょうどその時、イナブ(ニナブ)の町は祝祭ではなやいでいた。マルトゥは(友人たちとともに ?) イナブ(ニナブ)にでかける。マルトゥは広場で開かれていた格闘技コンテストに参加して、つぎつぎに相手を殺していく(53~75)。
7. 格闘技の主催者(?)ヌムシュダ神はマルトゥの勝利を喜び、褒賞として財宝を与えることを提案するが、マルトゥはそれを拒否して、かわりにヌムシュダ神の娘を所望する(76~83)。
8. ヌムシュダは、婚資として大量の家畜をマルトゥに要求する(84~111 : セクション前半ではかなりの部分が欠落しているが、とりあえずこれらの行を、ヌムシュダの発言として復元してみた)

9. マルトゥ(?)は、イナブ(ニナブ)の町の有力者たちだけでなく、奴隷女たちにまで貴金属の贈り物を気前よく与える(112~125)。
10. 結婚が決まると、ヌムシュダの娘にたいして、女友達が忠告する。マルトゥと結婚してはなりません。あんな野蛮な、テント住まいの、かすかすの禁忌を犯し、神を敬うことをしない人と結婚してはなりません(126~139)。
11. 娘による結婚宣言。ニナブ(イナブ)への賞揚(140~142)。

3.

3.1

この復元には、問題が山積していることを認めなければならない。以下いくつかの問題を指摘しておこう。

物語の舞台となったイナブ(ないしニナブ)NI-na-ab^{ki}の町は、まだ確定できない。i₃-na-ab^{ki}とするか ni-na-ab^{ki}と理解するかさえ、研究者によって見解が分かれている。もしニップル出土の文学テキスト・カタログに見える in-na-ab me-a を「マルトゥの結婚」第1行前半の変異体と理解できれば、イナブの読みがまさることになるが、これさえ確定的ではない。ただ物語第1行にイナブ(ニナブ)とペアであられるキリタブの町は、たしかにすでにウル第3王朝創始者の碑文(「ウル・ナンムの地籍碑文」)に言及されている。「(これは)キリタブの町のヌムシュダ神の耕地である。ウル・ナンムは(その境界を)彼(=ヌムシュダ神)のために定めた」(Frayne, RIME 3/2 51: Ur-Nammu 21, i 13-16)。キリタブの町は、ニップルよりさらに北方のカザル市と遠からぬところに位置していたことは確実である(おそらくカザルの西方)。「マルトゥの結婚」では、イナブ(ニナブ)の有力者としてヌムシュダ神が言及されているのだから、イナブ(ニナブ)が実在するとすれば、それはカザルにきわめて近いということになる。カザルの主神もヌムシュダであった。

この物語には「神話」的要素はほとんど欠如しているけれども、主人公マルトゥには、一貫して「神」を示す決定詞が添えられている。シュメール語マルトゥ(アッカド語アムル)とは、ほんらい、西方にすみ、シュメール人やアッカド人とはことなる言葉を話し、ことなる生活様式・風俗・習慣をもつ人々を指す。したがって前3千年紀、シュメール人が民族の実体を失わなかった時代にシュメール人が「神たるマルトゥ」を文書に記すことは、ほとんどない。「神マルトゥ」とは、マルトゥの人々(アムル人)の祖先を象徴的に示すために創造された概念Heros Eponymosなのであろう。これらの問題については、とりあえずD.O. Edzard, Martu (Mardu) A Gott, B Bevölkerungsgruppe, *Reallexikon der Assyriologie* 7 (1987-1990), 433-440を参照。

「マルトゥの結婚」は、イナブ(ないしニナブ)の町の外に住むマルトゥが、結局、町の有力者(神)の娘と結婚するという物語であるが、ウィルケは、これを前3千年紀の末アムル人がしだいに南部メソポタミア諸都市に浸透していく状況に重ねあわせて、理解しようとしたことがある。アムル人イシュビ・エツラはウル第3王朝の5代王イビ・シンから独立してイシン王朝を開いたが、彼は、自立するにあたってはやくからカザルを占領していたふしがあるからである。C. Wilcke,

Zur Geschichte der Amurriter in der Ur-III-Zeit, *Welt des Orients* 5 (1969), 22. むしろ私は、クラインらのように、民話的要素を重視して、この物語を理解したい。

3.2

この物語を理解するために重要なポイントは、マルトゥが母親にたいして訴えるセクション2、3であるが、個々のシュメール語章句の解釈は、研究者によっておおきくことなる。

たとえば第19行以下について、クラインとオックスフォード・グループは次のような訳を与えている。

クライン

19) u₄-ne u₄-te-na u[m-ma-te]-a-ra, 20) ki-nig₂-ba-ka um-m[a-te]-a-ra, 21) igi-an-še₃ uzu-du ni₂-ba na-ni²-ga₂²-ga₂, 22) nig₂-ba lu₂ dam-du₁₂ min-am₃ i₃-ga₂-ga₂, 23) nig₂-ba lu₂ dumu-du₁₂ eš₅-am₃ i₃-ga₂-ga₂, 24) nig₂-<ba> guruš-sag-dili aš-am₃ i₃-ga₂-ga₂, 25) ^dmar-tu aša-ni min-am₃ i₃-ga₂-ga₂

19) ある日夕刻が近づいたのちに、20) 分配の場所で(夕刻が)近づいたのちに、21) アン神の前に肉の分け前がおかれ、22) 妻帯者の分け前として2倍がおかれ、23) 子もちの男の分け前として3倍が置かれ、24) 独身者の分け前として1ポーションが置かれる。25) ただマルトゥにだけは、2倍がおかれる。

オックスフォード・グループ

21) 彼らはEŠ.LIL.DU神の前で配当量 を確定した。22) 彼らは妻帯者への配当を2倍と確定し、23) 彼らは子持ちの男への配当を3倍と確定し、24) 独身者への配当を1倍と確定した。25) しかしマルトゥへの配当は、彼が独身であるにもかかわらず2倍と確定された。

クラインも、オックスフォード・グループも、夕刻、狩猟の獲物の分配(nig₂-ba)が神の前で行われたのだという。とりわけクラインによれば、マルトゥは実質的には部族長シェイクの役割をはたしているにもかかわらず、独身という理由で、彼だけ家族をもっている男とは差別されたことの不満を訴えたのだという。

これにたいしてクレイマー(1990年)だけは、ki-NIG₂-ba-ka(20行)をki-ninda-ba-kaと読み、「パン貢納 bread-offeringの場において」と理解している。つまりクレイマーは、マルトゥは独身者であるにもかかわらず、妻帯者と同じ量の負担を強いられていると不満を持ったというのである(e.g. 22: “Bread-offerings - he who has a wife places two of them”)。

シュメール語 nig₂-ba の本来の意味からすれば、クラインらのように「分配」と理解したほうがよい。ki-ninda-ba-kaという読みはやはり無理であろう。そしてもしクラインのように、21行にuzu-duが復元でき、これに肉のポーションの意味を認めることができれば、ここで集団狩猟の獲物をどのように分配するかが述べられているとするのは、たしかに有力かつ、魅力的な解釈であろう。いっぽうクレイマーは、マルトゥが不満をもった理由として、独身者マルトゥが2倍の負担量を要求されたと考えたのであろう。

マルトゥはすでに他の独身者とちがって2倍をもらっている。だから、クライン訳によっても、

まだ問題はすべて解決するわけではない。マルトゥが結婚させてほしいと訴える理由として、1) 結婚し、子供をもつことで、2倍でなく3倍の獲物分前がほしい、あるいは2) 結婚することで、他の妻帯者の差別意識を払拭したい、という理由を想定しなければならない。テキストをすなおに読むかぎり、マルトゥは2倍という数字自体に不満をもっているように見えるから、おそらくわれわれは第1の説明を採用しなければならなくなる。これは、あまり明快な説明ではない。たしかにNIG₂-ba をクレイマーのようにninda-baと読むことはできないが、だからといってnig₂-baを神々に分配するためにガゼル狩猟民たちが持参する獲物と解釈する考えも、まだ完全に捨て去られるべきではない。

クラインとクレイマーの考えの違いはおおきい。クラインらにしたがえば、マルトゥはすでに部族内で有力な役割を果たしているにもかかわらず、独身であるが故に他独身者よりはおいが、それでも子供をもつ男よりは配当が少なかったという。いっぽうクレイマーの訳は、マルトゥは部族内で低い地位しか与えられていないということを前提としているように見える。クライン説では、すでに部族内で有力であったマルトゥが、のちイナブ(ないしニナブ)の町の有力者の娘と結婚することになる。いっぽうクレイマー説をおしすすめていけば、部族内でよい処遇をうけていない若者マルトゥが部族を飛び出して、町の有力者の娘と結婚するというプロットが想定される。プロットはまるで違ってくるであろう。

第32、33行の解釈も、未解決のままのこっている。マルトゥは母親にたいして、「わたしの町では友人、仲間はみな妻帯しているが、私だけ妻も子供もない」と訴える(26-31行)。問題は次の行である。

クライン

32) giš-šub us₂-sa dirig-ku-li-gaz-še₃, 33) maš du₁₀-s[a] bi₂-dab₅ dirig-du₁₀-sa-gaz-še₃

33) 定められた配当分は私の友人より大きい。33) 仲間は1ガゼルを得た(が)、私の分け前は仲間のそれよりも大きい。

オックスフォード・グループ

32) 定められた割当分は、私の友人(のそれ)を凌駕して、33) 私の仲間よりもはるかに多い。(にもかかわらず)私は半分を受け取った(だけだ)。

33行冒頭にみえる maš をクラインは「ガゼル」と、オックスフォード・グループは「半分」と解釈しているのである。

この個所にかんしては、まだ訳を確定することは困難だといわざるをえない。あとひとつの解釈として、両行を、私への分け前は友人たちより多く定められているにもかかわらず、(神ないしイナブの町が私から)私の友人たちより多くの税を取り上げた、と考える、すなわち maš を「ガゼル」、「半分」でなく「税」と解釈してみることができるかもしれない。〔ただこれは、前提として、21行以下は狩猟者たちへの獲物配分量のちがいを記述していると解釈している。〕

33行にみえるmaš、第17、18行のmašをガゼルと訳すとしても、それはけっして通常の用法ではない。前3千年紀末の行政文書では、ガゼルは通常maš-das (mašda) [= MAŠ.GAG]と表記される。〔ただし後代のシュメール・アッカド語辞書テキストでは、mašが「ガゼル」と訳されることもある。〕この物語でなぜガゼルがmašと表現されているのか、その理由はわからない。なお、文学テキストではガゼルとともに狩猟の対象として描かれているのはシリア・ノロバ(anše-edin-na「平原のロバ」)であるが、「マルトゥの結婚」ではシリア・ノロバは言及されていない。

3.4

マルトゥがヌムシュダ神の娘と結婚するにあたって、イナブ(ニナブ)の人々に財宝が分配されている(112~)。テキストでは主語は明示されていない。とりあえず私は、マルトゥが人々を懐柔するために高価な贈り物をしたと考えてみたが(マルトゥは若い、豊かな部族民であることを前提としている)娘の結婚にあたって、ヌムシュダ神が「気前の良い」富者として、人々に金品を分与したと解釈することも、もちろん可能である。

4.

ガゼル狩猟は、さまざまなジャンルのシュメール語文学テキストに断片的に言及されているが、ガゼル狩猟民そのものを描いた作品は他には存在しない。この物語の重要性は、はかりしれないのである。

この物語はいくつもの読み方が可能である。まず、これをガゼル狩猟民と都市民の対立と共存、妥協の物語として読むことができる。母親がマルトゥに与えた助言は、結婚の勧め以外に、都市のすぐ外に居を構え、仲間とともに生活しなさいというのであった(50~52)。母親は都市内に住むことは勧めていない。けれどもテント生活をしろと命令しているのでは、けっしてない。町のすぐ外で家をもち、果樹園(?)をもち、井戸を掘れと助言しているのである。

ヌムシュダの娘とマルトゥの結婚話がまとまったとき、娘の女友達は娘に結婚を思いとどまらせようとして、都市民がもつ典型的な差別意識を述べたてる。サルの容貌をもち(127)、たえず放浪する人であり(128, 130)、知的に劣っていて、周囲に問題を引き起こし(132)、テントに住んで、祈りは行わず(133)、山岳地帯に住み、神々の場を知らず(134)、山のきのこを食べ(135)、生肉を食べ(136)、家を持たず(137)、死ぬとき埋葬もされない(138)。ここで女友達に語らせているのは、非都市生活者にたいしてシュメール文学がしばしば採用する差別表現である。このように非難されるのは、アムル人だけではない。非難はそのまま、東方エラムの人々にも向けられてもよい。要するに、非都市民の特性としてシュメール文学がすでに確立している表現がここで採用されただけである。

ヌムシュダの娘の答えは簡潔である。「私はマルトゥと結婚しようと思う」(141)。

非都市民の特性を示す表現にかぎらず、この物語にはシュメール文学がもつ常套句(ストック・

フレイズ)が各所にちりばめられている。たとえばマルトゥの母は「あなたの選択(基準?)にしたがって妻を娶れ、あなたの心の望みに応じて妻を娶れ」と教える(47-48)。この表現が具体的にどのようなことを意味しているかはまだ議論の余地があるが、これは当時の人々にはよく知られていて、「ことわざ」集をはじめ、おおくの文学テキストにあらわれる。

マルトゥは娘の父親による褒賞提供を拒否して、「あなたの銀、それはいったいどのような意味があるのか、あなたの(宝)石、それはいったいどのような意味があるのか」と言いかえす(81)。これを、銀や宝石はガゼル狩猟民にとって縁のないものだとしてマルトゥが言い放ったとは理解しない方がよい。むしろこれは、もともと、メソポタミアの都市生活者が持つ、ある種の無常意識(ヴァニタス)を表現しているのではないか。私は81行と同一の表現が他テキストにみえる例をまだ知らないが、仮にこれがまったく異なるコンテキストであらわれたとしても、けっしておどろかない。

5.

この物語を一種の民話として理解するのが、もっとも実りおおい。シュメール語文学作品のなかでは、若い男による嫁探しを主題とし、しかも民話的特徴をもつ物語は、この「マルトゥの結婚」がいがいには、「スドの結婚」(ないしは「エンリルとニンリル2」)をあげるのみである。じっさい、当時の婚約、結婚の手続きをこれほど詳細に記述している文献は、この2テキスト以外には、存在していない。後者にかんしては、オックスフォード・グループ電子出版(ETCSL 1.2.2)以外に、シヴィルの優れた研究(翻字、訳、注釈)がある。M. Civil, Enlil and Ninlil: The marriage of Sud, *Journal of the American Oriental Society* 103 (1983), 43-66. この物語はつぎのようなプロットをもつ。若きエンリルがケシュの町にやってきて、ニサバ女神の娘スドを見初め、結婚を申しこむが、侮辱されたと感じたスドは拒否する。母親ニサバの助言(スドへ、エンリルへ)もあって、結局、婚姻は成立する。結婚ののちスドはニンリルとよばれるようになる。

「マルトゥの結婚」でも「スドの結婚」でも、若者はみずからの居所(ガゼル狩猟民の世界、都市世界)を出て、都市の有力者の娘とめぐりあう。結婚にあたって二つの物語とも母親が重要なアドバイスを与える。ただし「マルトゥの結婚」では若者の母親が、「スドの結婚」では娘の母親が重要な役割をはたす。「マルトゥの結婚」では、おそらく娘の母親は登場しない。また婚約ないし結婚にさいして、膨大な数の家畜が娘の家に送られるのは、二つの物語に共通する。

「マルトゥの結婚」では結婚にさいして、娘の女友達を登場させていた。結婚にあたって男性側の友達の意義を記述した物語として「ドゥムジとエンキムドゥ」を参照することもできる。後者については、セファティのすぐれた訳、注釈が参照できる。ETCSL 4.08.33 および Y. Sefati, *Love Songs in Sumerian Literature: Critical Edition of the Dumuzi-Inanna Songs* (1998), 324-343 (The shepherd and the farmer: suitor's rivalry).ここでは気まぐれなイナンナ女神が、牧羊の神ドゥムジとは結婚せず、小水路と堤(すなわち灌漑農耕)の神エンキムドゥと結婚したいと言いだしたため、ドゥムジとエンキムドゥのあいだに不和が生じる。ついでテキストでは両者がイナンナに差し出すべき産

物が列挙される、すなわち農耕と家畜飼育の世界が対照される。結局、耕地近くでドゥムジが家畜放牧することをエンキムドゥが認め、和解が成立する。そしてテキストでは、ドゥムジは来べきイナンナとの結婚式にエンキムドゥを友人として招待しているようにみえる。

名祖Heros Eponymosであり、神たるマルトゥが主人公として、わかりやすいプロットをもつ「民話」にあらわれる。「マルトゥの結婚」の魅力はそこにある。この物語を読んだ(聞かされた?)バビロニア人たちも、その魅力を感じとっていたにちがいない。

セム系部族社会の形成に「環境学」を求めて

田中 剛 (名古屋大学大学院環境学研究科)

計画研究「環境地質学、環境化学、¹⁴C年代測定にもとづくユーフラテス河中流域の環境変遷史」研究分担者

「環境」の2字がもてはやされて久しい。「環境問題」は、組織の、あるいは予算の、打ち出の小槌であった。しかし、環境“学”がいったい何を究めるのか？何を教えるのか？ となると当事者ならずともはなはだ心もとない。わが環境学研究科はその一分野に“持続性学”という網をかぶせた。そこでも、何が持続するのか？何を持続させるのか？ との自問が続く。筆者はその中心にあるのは人であり、社会であると考え。星野光雄教授を代表者とする当研究班は、“セム系部族社会の盛衰をはすかいに眺めながら”シリア東部ユーフラテス河中流域ビシュリ山系における自然環境の変遷を、環境地質学、環境化学、並びに炭素14年代に基づいて解明することを目的としている(星野：ニュースレターNo.1)。筆者は、その研究の中に環境学研究科の“学”を導く光明が見いだされないかと考えている。

筆者は、これまでに月・隕石試料や岩石に含まれる同位体を精密に測定し、この岩石は何億年前に地下深くのマントルから上昇したマグマから作られ、何千万年前に大陸の衝突で変成作用を被った！とか、愛知県東部地域のヒ素の分布は、金やアンチモンの分布と相関が高いので、人為汚染ではなく、自然界の熱水作用で形成されたものだ！などなどの研究を行ってきた。今回の特定領域研究でも気候変動を指示する花粉分析や炭素14年代の測定とともに、そのような微量元素や同位体を用いた研究を進める事はもちろんであるが、本研究の分担を機会にこれまでに試みられることがほとんどなかったであろう調査手法への挑戦を期している。

20世紀の地球化学における最も大きな業績の一つに、米国アーカンソー大学のPK黒田博士による、原子炉(連鎖核分裂)が天然に存在可能であるとの予言と、アフリカのガボン国におけるその発見が挙げられる。ウランの核分裂は、分裂し易い同位体がそこに乏しくなることと、核分裂の影響を受ける希土類元素の同位体に変化している事から裏付けられる。そしてその核分裂生成物が20億年を経た今なお、そこに濃集していることが、原子力発電による放射性廃棄物を長期にわたり地中に隔離できるという論拠の一つとなっている。

さて、話は大きく変わるが、皆さんは「ソドムとゴモラ」という映画をご覧になったことがあるだろうか？ずいぶん昔の映画であるが、今でもテレビで放映されることがある。ストーリーの結末

では、砂漠の中に繁栄したよこしまな都市ソドムが神の裁きにより滅ぼされるのであるが、その直前に正直な一家族が都市を脱出する。しかし峠を越える時、都市の快楽に未練が残る一人がソドムを振り返る。燃え上がるソドムの閃光を浴びたその一人は、岩塩になってしまうのである。これは旧約聖書の創世記の一部をもとにした映画である。聖書は、何らかの事実を基にして書かれているという考え(この考えが本特定領域研究は、それにとらわれないとする“聖書考古学”でしょうか?)からは、ソドムがどこにあったか?とか、都市を滅ぼした光は、断層活動に因るガスの噴出であったかとか、聖書に書かれている硫黄の雨とは、隕石雨の落下であったかとか、さまざまな考えが染みまれている。その一つに、天然原子炉の爆発(天然ウランが濃縮していた場所に地下水が流れ込み、連鎖反応がおこった? 1999年の東海村JCOの臨界事故に類似)というのものもある。峠で振り返った一人は、JCOの青い光に曝されたのだろうか。このような考えの正当性を評価するのは、“その証拠”であろう。上記の仮説は、沢山の欧米の信者によって検証されているに違いない。天然原子炉の爆発がなかった事も、実は調べられている事であろう。筆者は、しかし、これまで取り上げられる事の少なかった“環境放射能”を指標の一つとしてピシュリ山系における自然環境の変遷を眺めてみようと考えている。

放射能というと核実験や原発からの漏洩がまず頭に浮かぶが、私たちは常に自然界からの放射能を浴びている。浴びている放射能の1/3は宇宙線によるもので、標高の高い場所ほどその量が多い。あとの1/3は周囲の岩石や土壌にふくまれる天然のウラン、トリウム、カリウムとそれらが放射壊変する途中に出現するラジウムやラドンによる。したがって地質にこれらの元素が多い地方には放射能が多い。残りの1/3は人体に含まれる必須元素のカリウムによっている。日本で放射能の多い地方は、上記元素を沢山含む花崗岩の多い岐阜県や、広島・岡山県で、逆に少ないのは、火山岩の多い東北地方である。その違いは高々数倍である。パキスタンやブラジルには、100倍以上も放射能が多い地域がある。カリウムはどの地質や岩石にも1~3パーセント含まれており、大幅な地域変動の原因とはなりにくい。変化の元はウランやトリウムとそれらから作られるラジウムなどの偏在による。放射能の測定は、サーベーターといってすべての放射能の総量を測る装置が一般的である。しかし、サーベーターではいったいどの核種の変動により、放射能が増減しているのかわからない。その峻別が可能なのは、大学のアイソトープセンター等に設置されている半導体検出器を備えた測定装置である。半導体検出器は空調された部屋にあり、重く、壊れやすく、その価格は一千万円を越える。もちろん試料を採集して大学のアイソトープセンターに持ち込んでも測定出来る。しかし、それを目的としてシリアから数百の土壌試料を輸入するのは現実的でない。

筆者は、原子炉などフィールドでの検査にもちいられる、NaI検出器を備え放射線スペクトルが解析し得る装置がシリアでの調査に最適ではないかと考えた。多方面から検討の結果C社の測定器が最適であると見られた。しかし、この測定器は原子力関係の研究にも転用できるものであり、その製造国からシリアで計画中の本研究と装置の使用目的についての詳細なレポート(英文)を求められた。

10月の申請から待つこと4ヶ月、数度の質問に答えながら、この2月18日にやっとシリアへの持ち出し許可と装置を手にする事ができた。このニュースレターに間に合わせるべく得たのが下記の放射線スペクトルである(図1)。昭和35年頃建築された名古屋大学理学部A館玄関内と昭和44年頃建築された理学部E館玄関内での測定結果である。ピークの大きさ自体にも意味があるが、ここでは、相対的な大きさに注目したい。二つの建物の間でカリウムからの放射線に大きな違いは見られないが、トリウムからの放射線はE館で相対的に2倍多い。A館とE館に使われている骨材の違いを反映しているのである。データの重要性は、“どちらが体に良いか悪いか？”などの比較ではなく、地質、骨材についてのフィールド情報が現場で得られるところにある。

筆者は、この装置をシリアに持ち込めば文明と環境についての新しいデータを、非破壊で手にし得ると確信する。しかし先年、ヨーロッパの調査隊ではGPSが没収され所持者が国外追放になったと聞き、星野調査隊が、空港からビシュリならぬ砂漠の監獄に直行することになったらどうしよう！と案じているこのごろである。

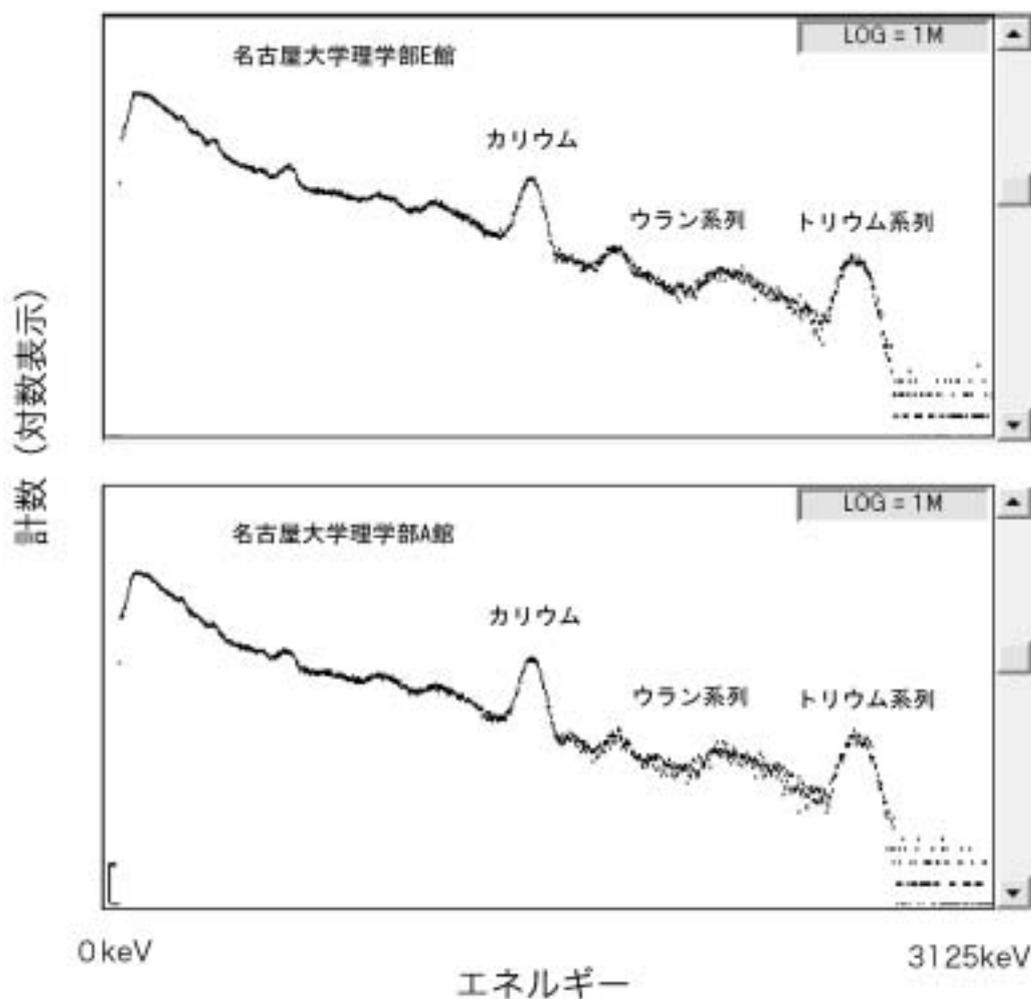


図1 名古屋大学理学部E館 上 およびA館 下 内での環境ガンマ線スペクトル
どちらも1時間の積算結果。一見両者の差はわかりにくい、トリウム系列からのガンマ線はE館のほうが2倍ほど多い。建物に使われている骨材の違いを反映していると考えられる。

発掘における考古植物学のススメ

丹野 研一（総合地球環境学研究所）

計画研究「西アジア先史時代から都市文明社会への生産基盤の変化に関する動物・植物考古学的研究」研究分担者

西アジアでは世界に先駆けて、農耕をベースにした生業が始まった。また灌漑農業など、世界初の大規模かつ商業的な農業が展開された。狩猟採集をしていた人々が、定住し農耕牧畜を始めた頃には、いったいどのような食物を食べていたのであろう？また農業生産と流通、都市化との関係はいったいどうだったのか？など、植物がキーとなるトピックスは、西アジア考古学にはたくさんある。

西アジアで作られた作物には、コムギ、オオムギ、ソラマメ、エンドウマメ、レンズマメ、ヒヨコマメなどがある。これらは今から約1万年前に、野生の状態から人間が管理する栽培の状態にうつされたと考えられている（ただし決定的な証拠は出されておらず、今後の研究が必要である）。それ以前にはピスタチオやアーモンド、やや少なくエノキ、シソ科 *Ziziphora* 属、イネ科植物、それから多種多様の同定不能な小粒マメ類がよく利用されていた。もちろん暖をとるためになどに、木材もたくさん使われた。これらがよく出土することは、長年行われてきた植物研究の結果として、やっとわかってきた。しかしこれらの植物がどのように利用されていたのか、とくに調理はどのようにされていたのか、不明な点は多い。彼らの生活の実像をイメージさせる発掘例は、とても少ないのが現状だ。

そのなかで、ジェルフェルアハマル遺跡(シリア)の台所(キッチン)は、たいへん貴重な発見例であろう。そこでは紀元前9000年頃に火事が発生し、そのときの状態がそのまま焼け跡となって見つかった。出火時は料理の最中で、シロガラシ類の種子がすりつぶされて団子になった状態で、サドルカーンの上に発見された。シロガラシ類は今日でもおなじみの香辛料マスタードそのものが、その近縁の植物である。紀元前9000年頃に、現在のマスタードづくりとほぼ同じような加工工程が行われていたことは、驚きである。また甘くもなく、栄養が格段に良いわけでもないカラシを嗜好していたという味覚に、親近感がわく。発掘隊長のダニエル・ストゥルラーダーは「あのキッチンにはなんでもあった、ただひとつだけないものといったら、料理をしていた女性だけだった」と言っている。作りかけのカラシの団子がサドルカーン上にあったことで、料理という行為が具体的に動いて見えてくるような、興味深い発見だ。

人間が行動をとるとき、その動機として食糧問題があることは多い。過去に数えきれないほど起こった戦争は、実り豊かな土地を得るための、領土争いであることが多かった。世界一の大国アメリカも、ジャガイモ飢饉のおかげで国を捨てたイギリス人らによって、建国された色合いが

強い。遺跡の発掘では、背景の食糧事情を明らかにすることが、遺跡の住人が豊かな暮らしをしていたのか、非常に切迫した環境を生き抜いていたのかについて知る手がかりとなる。逆に生業がわからないと、めぼしいトピックスをつなぎあわせた、偏ったストーリーができてしまう恐れがある。例えば上のアメリカ建国の例でいうと、「アメリカは、列強イギリスが産業革命で力をつけて、順風満帆、意気揚々と海を渡りフロンティアを開拓してできあがった、勝利の国家！」というような一面的な解釈に陥ってしまいかねない。ジェルフェルアハマル遺跡の例でもそうであるように、発掘において植物調査があるのとないのでは大違いのことが実際にあるので、発掘にはぜひとも植物調査を加えてほしいものだと思う。

Newsletter 「セム系部族社会の形成」 No.2 2006年3月31日発行

発行： 文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」
「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」
代表 大沼克彦

編集：大沼克彦 藤井純夫 西秋良宏 常木 晃 佐藤宏之 宮下佐江子
事務局：〒195-8550 東京都町田市広袴1-1-1 国士舘大学イラク古代文化研究所内 大沼研究室
Tel：042-736-5489 Fax：042-736-5482 E-mail：kaonuma@kokushikan.ac.jp
ホームページ：http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/index.html

